慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Л· メンデリソンの農業恐慌理論
Sub Title	"Specific features of the operation of the law of crises in agriculture" by L. Mendelson
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.2 (1959. 2) ,p.147(43)- 169(65)
JaLC DOI	10.14991/001.19590201-0043
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590201-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(17) O'Leary, J. J. "Malthus and Keynes" in The Journal of Political Economy Dec. 1942.
(18) O'Leary, J. J. "Malthus' General Theory of Employment and the Post-Napoleonic Depressions" in the Journal of Economic History, Nov. 1948.
(19) Ricardo, D. "Principles of Political Economy and Taxation," 1817.
(20) Ricardo, D. Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus" 1810-1823.
(21) Ricardo, D. "Notes on Malthus' Principles of Political Economy, (Baltimore 1928)
(22) Robin, L. "The Theory of Economic Policy. 1952.
(23) Salin, E. "Geschite der Volkswirtschaftslehre, 2 te Aufl. 1929.
(24) Say, J. B. "A Treatise on Political Economy, English trans." 1821.
(25) Schumpeter, J. A. "History of Economic Analysis." 1954.
(26) Sen, S. R. "Sir James Steuart's General Theory of Employment, Interest and Money" Economica Vol. XIV No. 53 Feb 1947.
(27) Sen, S. R. The Economics of Sir James Steuart, 1957.
(28) Smith, Adam. "Wealth of Nations," 1776.
(29) Steuart, James "Principles of Political Oeconomy," in the Works of James Steuart by His Son, 1805.
(30) 高橋誠一郎「重商主義経済理論研究」。
(31) 田添京二「スチュアート蓄積論の基礎構造」内田義彦編「古典経済学研究」所載。
(32) Don Patinkin, "Money, Interest and Price" 1957.

資料

Л・メンデリソンの農業恐慌理論

常盤政治

まえがき
一　問題提起
二　全般的過剰生産恐慌の成熟及び進展における農業の後進性の法則の役割
三　全般的過剰生産恐慌の農業における作用の特殊性と再生産過程の循環
四　農業恐慌
五　長期農業恐慌における農産物商品の周期的過剰生産進展の諸条件
六　農業恐慌の大規模な長期性の諸原因とその克服の諸条件
七　長期農業恐慌と農業における再生産の循環
八　結論・農業における過剰生産恐慌の二つの形態の一般的特徴

Л・メンデリソンの農業恐慌理論

まえがき

わが国における農業恐慌の理論的研究は、長い間、地代によって「特殊化」された「慢性的農業恐慌」乃至「長期農業恐慌」の理論に依拠していたのであるが、(註1) 最近の新しい研究動向は、かかる「長期農業恐慌理論」を否定して「農業恐慌を循環性の周期的過剰生産恐慌として理解しようとする」方向にあるといっていい。(註2) しかし、かかる方向が充分に地固めされるためには猶多くの理論的＝実証的研究の試煉が残されているといわねばならない。

ここに紹介しようとするЛ・メンデリソンの最近の労作「農業における恐慌法則の作用の特殊性」(Л. Менделсон: Особенности действия закона кризисов в сельском хозяйстве, 《Мировая экономика и международные отношения》, но. 7. 1958 г. стр. 45-63) は、その「地固め」のための当面の理論的試金石というべきであろう。蓋し、たとえば、「長期農業恐慌説をうちたてる

ためには、価格の長期的低落傾向がなぜあるかの理論を、まずうちたてねばならぬ(註3)」が、かかる理論は成立しえないが故に「原則的には農業恐慌は工業恐慌と同じ周期をもつ……と考えるのが……最も正当な考え方である(註4)」というのが、「長期農業恐慌理論」に向けられた有力な批判の一つであるとするならば、Л・メンデリソンは「農業(アグラフ)恐慌(クリズィス)は先ず第一に、価格の長期的低落にあらわれる」(там же, стр. 57)ことを指摘し、農民が「恐慌状態においても以前の農業生産規模を維持し、市場に放出する多くの農産物商品を増大することをさえ余儀なくされる」(там же, стр. 58)原因を剔抉して説明しているからである。しかし、だからといって彼の農産物価格の長期的低落についての論証の仕方が全く正しいというわけでは勿論ない。ただ、「長期農業恐慌論」の理論的根拠をもう少しほりさげて考えてみる必要があることを指摘したいのである。「長期農業恐慌理論」の立場に立ちながら、「Л・И・リュボッツも本質的には解決を与えていないし、問題に気付いてもいない」(там же, стр. 60)点をもとりあげたЛ・メンデリソンのこの労作は、その意味で恰好のものといえよう。できるだけ詳しく忠実に紹介しようとする所以である。

(註1) 拙稿「農業恐慌理論の一省察」、『三田学会雑誌』第五十巻第四号、四六頁参照。

(註2) 拙稿「いわゆる『十九世紀末農業恐慌』の性格について」、慶応義塾経済学会『経済学年報』1、六二頁。

(註3) 阪本楠彦「農業恐慌」、近藤康男編『農業理論研究入門』所収、三一八頁。

(註4) 同上、三一三頁。

一 問題提起

農業はブルジュワ社会においては工業と同じく資本主義の経済法則に基いて工業と同じ方向に発展する。小規模な農民的生産の「強靱性」(《устойвости》 мелкого крестьянского производства)とか農業の非資本主義的進化といった非科学的なブルジュワ的考え方に反して、最近、小生産者の歴然たる破壊(неуклонное разорение)、資本主義的賃労働制度の発展、資本及び生産の集中、大規模な機械制生産への漸次的移行が行われている。資本主義諸国の農業には恐慌の法則が作用するし、作用せざるをえないのである。従って、そこには再生産の一定のリズム及び循環性があらわれる。蓋し、経済的循環過程は恐慌法則の作用の形態でありメカニズムにほかならないからである。

併し乍ら資本主義の発展とその法則の作用は農業においては重要な特殊性を有している。それらが土地所有の独占、土地の資本主義的経営の独占を生みだし、そこに価格形成の特殊性と地代関係が源を発しているのである。

これらの特殊性の主な表現は、農業が工業から立後れるという法則である。農業においては、資本主義的諸関係による前資本主義的諸関係の排除、資本の集中、大規模な資本主義的生産の機械制段階への移行が工業におけるよりもヨリ後れて生ずる。産業革命は農業においては工業におけるよりも遙かに遅く始まり(アメリカ合衆国でさえ一九世紀の後半である)、更に遙かに長い間かかって一般化したのであった。最も発展した資本主義諸国においては、一九世紀全般の長期に亙り、二〇世紀第一・四半期にさえ、農業は大規模な資本主義的生産の機械制段階よりもマニュファクチュア段階により近い状態のままであったのである。その点に関しては、事態は二〇世紀の三〇年代とくに第二次大戦後になってようやく変るにすぎず、しかもそれは若干の主要な資本主義国においてである。世界市場への農産物商品の供給者として重要な役割を演じている多くの国々においては、その生産において未だ手の労働が支配的であり、そしてしばしば前資本主義的諸関係(小商品生産、封建制の遺物)がきわめて強い。

資本主義的農業においても、生産の社会的性格と個人的領有(所有の資本主義的形態)との間の矛盾が基礎である。しかし乍らそれはここでは資本主義的地代の諸矛盾によって複雑化し、従って、追加的な重要な現象形態をとる。それは社会的生産の利潤獲得への従属と利潤の外になお地代をもたらすところの農業に充用される資本の必然性との間の矛盾としてあらわれる。農業における生産力発展の限界は資本のみならず、土地所有の独占と土地の資本主義的経営の独占——利潤のみならず地代——である。

資本主義的農業の特殊な矛盾、農業の工業からの立後れは恐慌法則の(従ってまた再生産の循環過程の)農業におけるあらわれに重大な特殊性をひき起す。これらの特殊性を解明するためには、全般的過剰生産恐慌の成熟と進展の過程における農業の工業からの立後れの法則の役割、全般的過剰生産恐慌及び再生産の循環過程の農業における特殊性、過剰生産恐慌の特殊形態としての農業恐慌を究明しなければならない。

これらの諸問題はわかち難く結びついている。それらは、農業における恐慌法則の作用の特殊性に関する一つの問題の相異なる諸側面にすぎないのであって、それらの相互関連と統一なくしては正しい解答はありえない。これらの相互関連を顧慮しないことが、農業恐慌の拙劣な誤った解釈の原因の一つなのである。

二 全般的過剰生産恐慌の成熟及び進展における農業の後進性の法則の役割

恐慌に関する文献には、恐慌を凶作や農業生産の自然生物学的特殊性によって説明しようとする傾向がある(ジェヴォンス、ムル、ブランダウ、ゾムバルト、一連のナロードニキの経済学者達、その他)。カウツキーとその追随者達はマルクスの恐慌理論を修正してかかる見解に陥ったのであった。かかる考え方及びその弁護論の重要な方法論的欠陥は、まさに資本主義の本質とその矛盾によってひ

きおこされる恐慌の原因をあらゆる社会構成に内在的な自然生物学的要因だとしていることにある。

だが、かかる考え方を全く拒絶して、農業の工業からの立後れの、全般的過剰生産恐慌の成熟過程における役割を等閑にふしてはならない。「農業は――とレーニンは書いた――その発展において工業より後れる。これはあらゆる資本主義国に特有の現象であり、国民経済の相異なる諸部門間の均衡破壊、恐慌と物価騰貴の最も深い原因の一つをなしている」(註1)

恐慌の歴史はこのレーニンの規定の方法論的重要性に多くの確証を与えている。恐慌の不可避性を惹起する恐慌の基本的原因を恐慌の成熟及び爆発を促進しうる原因や要因（一般にそれらは何らかの程度において資本主義の基本的矛盾の表現であるが、具体的な歴史的性格をもちうる）と混同してはならない。それらの中で重要な役割を演じているのは農業の工業からの立後れである。

循環的高揚の進行において、農業の工業からの立後れはしばしば、生産設備の工業力と工業用の農産物原料生産との間の不均衡、同様に、工業人口のための食料に対する需要とその供給との間の不均衡に導く。

農業における自然生物学的特殊性、すなわち、農耕及び畜産における生産期間の相対的長期性は、循環的高揚局面におけるかかる不均衡の発生において甚だしく下位の、第二義的意義を有する。その不均衡の発展の基礎（原因）は、資本主義経済の社会的諸条件とその諸矛盾のなかにある。これらにはつぎのことがふくまれている。

(a)一般に、資本主義経済の無政府性と固定資本、とくに工業の生産設備の増大、(б)恐慌とそれから生ずる再生産の循環的性格によって生みだされる痙攣、循環的高揚局面における工業生産設備の飛躍的増大、(в)農業における生産の増大を抑制する土地所有の独占と土地の資本主義的経営の独占、(г)大規模な機械制生産が支配的となっている工業と手の労働が主となっている農業との技術水準の不均衡。資本主義的に最も発展した国々においてさえも、この不均衡は恐慌及び循環過程の殆んど全歴史に亘って存在しているのである。

高揚局面における農産物原料及び食料の生産の立後れはそれらの価格騰貴の原因となる。原料の騰貴は供給を著しく増進する時期に生産費及び価格を高めるから、それだけ、織物、皮革、等々の工業諸部門の製品の販路を困難にする。食料及び農産物原料による工業製品の物価騰貴の増大は広汎な大衆の需要を抑制し、生産と消費との間の矛盾の尖鋭化と恐慌爆発の諸前提の成熟（назревание предпосылок взрыва кризиса）を促進する。

これらの矛盾と不均衡の発展は、農産物原料と食料の価格騰貴の増進を強化するところの商業資本及び投機的資本によって強化される。

これらの矛盾と不均衡の発展はある循環過程においては凶作によっても強化されるのである。凶作は恐慌の成熟と爆発を速めることができ、そして他方において、それは農業人口の工業商品に対する購買力及び需要を抑制する。より後れた農民が支配的な国においてはとくにそうである。

農産物原料を消費する部門の生産設備の拡大とその原料生産の拡大との間の不均衡、工業人口の食料に対する需要の増大とその供給の拡大との間の不均衡があらゆる全般的過剰生産恐慌爆発の必然的前提であると考えることは誤りである。かかる不均衡が存在しなかったり、若しくはこの不均衡が尖鋭的性格をもっていない諸条件のもとでも、恐慌は循環過程の全系列に激しく生じた。一つの循環たりともこの不均衡が恐慌爆発において決定的な意義を有したことはない。それらは循環系列において、資本主義的蓄積の全般的諸矛盾によって準備されたところの恐慌の到来をはやめたにすぎない。

(註1) B. И. Ленин: Соч., т. 22, стр. 81.

三　全般的過剰生産恐慌の農業における作用の特殊性と再生産過程の循環

恐慌の法則は大規模な工場制生産段階における資本主義の経済法則である。農業は一九世紀においては一国たりとも、この段階に達していなかったのであり、二〇世紀においても多くの国々が達していない。しかし乍ら、恐慌が手工業、家内工業、自営資本家的工業及びマニュファクチュア工業――たとえそれ自体としては、これらの生産諸形態が過剰生産恐慌の不可避的発生と反復を作りあげる諸条件を未だ内容的にそなえていないとはいえ――にもその作用を普及させたということは周知の如くである。これは、それらが社会的再生産の一過程において資本主義的工場制工業と結合されており、従ってその循環的変動にも関係せざるをえなくなっていることに基因する。

この法則（закономерность）は農業に対しても十分に（в полной мере）あてはまる。農業は、工業用原料及び商工業人口の食料供給者である。農業の生産物は、増大する比率において資本主義的商品交換（капиталистический товарооборот）の中に巻きこまれる。農業自体においても資本主義的諸関係が発展し、多くの国々においてそれが支配権を獲得する。農業に専門化が増進し、生産物が殆んど全部、工業及び工業中心の人口に吸収される生産部門が発展する（棉栽培、タバコ栽培、都市近郊野菜栽培、畜産等々）。すべてこれが、全般的過剰生産恐慌及び再生産の循環性の作用を農業に拡張させることとなっているのである。すべて工業循環の推転は農業にも一定の現象をひき起すのである。

しかし、理論的な困難は、全般的過剰生産恐慌と再生産の循環性の作用が農業に拡張されるか拡張されないかを明らかにすることにあるのではない。全般的な恐慌及び循環に農業が参加するという不可避性は理論的に疑う余地のないことである。遙かに錯綜した問題は、この恐慌及び循環に農業が如何なる程度、如何なる形態で参与するか、資本主義地代と農業の工業からの立後れの法則によって

生みだされるところの、農業における全般的過剰生産恐慌及び再生産循環の作用の特殊性とは如何なるものであるか、ということである。

農業の相異なる諸部門及び相異なる諸国の農業の全般的過剰生産恐慌の循環への参加の程度が同一でないということは、明らかに、多くの要因に依存している。先ず第一は、工場制工業用原料及び工業人口用食料として消費される生産物部分に依存している。次ぎに——農業における資本主義的諸関係の発展段階に依存している。最後に、資本主義的農業における大規模な機械制生産の発達水準に依存している。工業と農業において再生産過程の統一強化の傾向が作用しているが、それが全般的過剰生産恐慌及び再生産の循環の農業における作用の強化を意味するということはもっと明白である。

全般的な周期的恐慌の農業への波及ということは、農業商品の過剰生産が発生し、農業商品の供給が需要を凌駕するということを意味する。勿論、かかる過剰生産が出現するためには、農業自体の一定の内部的諸前提が不可欠である。それらは農業生産物が工場制工業全般の原料並びに、そこに従事している労働者や事務員のための食料という形態で、工場制工業資本の流通によって既に創り出されている。しかしかかる前提が存在するもとにおいては、農業における恐慌の展開（развертывание）は、工業における恐慌及びそれから惹起された農産物原料及び食料への需要の崩壊の結果として過剰生産があらわれるという重要な特質をもっている。農業における恐

慌現象（売行きの困難、価格の崩壊等々）の主要な根源（источник）は過剰生産、工業における恐慌である。

恐慌の発端的な主要な根源（очаг）は工場制工業（фабрично-заводская промышленность）である。農業においては過剰生産と恐慌は（マルクス及びエンゲルスの表現を用いれば）[註2]、第二次的形態で展開する（развиваются во вторичной форме）。実際には工業それ自体においても、その部門系列において似たような展開をみることができる。リカード学派の全般的過剰生産の否定に対して論駁してマルクスは次のように書いた。「全般的過剰生産の瞬間においては、若干の部分の過剰生産はつねに指導的諸商品の過剰生産（перепроизводство ведущих предметов торговли）の結果であり帰結にすぎず、つねに相対的であり過剰生産が他の分野に存在するが故にのみその過剰生産を来しているにすぎない。」[註3]しかし、特質は、農業においては第二次的形態における過剰生産の発生が原則である（является правилом）ということにあり、それは農業の工業からの立後れと資本主義的地代の矛盾によって合法則的に条件づけられているのである。農業恐慌（аграрный кризис）の発生のための諸条件が存在しているときの循環内での農業においてだけは過剰生産の発展は別である。

第二次的形態における恐慌の発展は工業においても、小規模生産、家内資本家的生産、マニュファクチュア的生産にとっては典型的である。それは大規模な機械制の資本制生産が未だ支配的となっていない多くの国々の経済にとっても特徴的である。大規模な資本主義的機械制生産の発展段階からはじめて、恐慌の法則が資本主義の経済法則として作用するということを忘れてはならない。この段階に達していないところでは、恐慌はつねに第二次的形態で到来し、過剰生産の主要な根源（главный очаг）はかかる部門やかかる国以外に存するのであって、それらは、工場制工業制度が支配的となっている国々や諸部門における過剰生産に圧迫されて恐慌に巻き込まれるのである。

一国のあらゆる諸部門における過剰生産の発生のための内部的諸条件において重要な役割を演ずるのは循環的高揚局面における生産の増大と固定資本の大規模な拡張である。農業においてはいずれも工業におけるよりも、はるかにおくれて生ずるのであり、農業において手の労働が優勢で未だ機械制生産が支配していない間はとくにそうである。農業においては過剰生産恐慌の内部的諸前提もヨリ後れて成熟する。工業の生産設備及びその生産の飛躍的、痙攣的拡張が行われる循環的高揚局面においては、工業の側からの農産物商品に対する需要の循環的拡張に対して農産物商品生産の拡張が間に合わないのである。農業生産物のかかる相対的過少生産から相対的な過剰生産への移行は、工業及びそれに従事している人口の側からの農産物に対する需要の急激な崩壊の結果（следствие）としてのみ到来しうるのである。

全般的過剰生産恐慌の作用及び工場用原料を供給する農業部門ではヨリ早く且つヨリ強く、食料を供給する部門ではヨリ後れてヨリ弱くあらわれる。原料需要（спрос на сырье）は直接に、たちまちそれを消費する工業部門の生産の変動を反映する。例えば、木綿工業の生産の収縮はそれに応ずる棉花消費の縮小を意味する。

恐慌は、食料、その中でも生産に第一に必要な欠くべからざるもの——穀物に対する需要の減少にさえ導く。恐慌期間中における食料に対する需要の崩壊を否定するブルジュワ的考え方は客観的現実と矛盾する。同時に次のことを忘れてはならない。すなわち、恐慌のもとにおいては、プロレタリア大衆の所得の減少が先ず第一に必需性のヨリ少ない消費財——家具その他の家庭用品を、次に——衣服、最後にはじめて食料とくに穀物に対する需要が低下するということ之である。大衆の貧困化はしばしば、若干の社会層が肉、脂肪、牛乳の消費減少という犠牲において最も多くの安価な栄養生産物（馬鈴薯、穀物）の消費を増大するということに導きうるのである。また、工業及び都市に吸収される生産物部分が例えば棉花栽培においては穀物栽培におけるよりも遙かにヨリ高いが故に、後者においては前者におけるよりも恐慌的な需要の収縮がヨリ弱く現象するということを顧慮する必要がある。全般的過剰生産恐慌が比較的長つづきせず且つ浅ければ、それは小麦及びその他の食料農産物の市場に明らかに表現される現象となりえないのである。従って、これらの農産物が極めて重要な意義を有している国のあらゆる農業においてもそうである。

全般的過剰生産恐慌は農業においてはなによりも先ず価格の低落にあらわれる。最も初期の恐慌においても、例えば一八二五年の恐慌においても、棉花及びその他の農業生産物の価格の急激な下落がみられたのであった。恐慌期における農業生産物の価格の下落は、しばしば多くの諸事情によって条件づけられている。高揚局面における工業及び工業中心地の需要の増大に対する農産物商品の生産の立後れが、農産物価格を吊り上げるので恐慌期の農産物価格の下落はそれだけ一層甚だしくなるのである。加うるに、恐慌時においては、恐慌の損失を転嫁するための各経営諸部門間の競争（конкурентная борьба）が急激に尖鋭化する。資本主義の発展と資本の集中の程度における農業の工業からの立後れは、この競争において農業を敗北させるのである。工業は、農産物商品価格のとくに急激な低下という方法によって、恐慌のおびただしい出費部分を転嫁することに成功する。同様にまた、農業も工業よりも遙かに小さい程度において、価格低下の反作用——生産の縮小という重要な手段を利用しうるということを考慮する必要がある。

全般的過剰生産恐慌の農業における作用の主要な特質の一つは、生産活動にはそれが工業におけるよりもはるかに弱くしか現われないということにある。これは農業における相対的に長い生産期間及び資本の緩慢な回転とある程度関係している。工業は企業を操業短縮に移したり、労働者の解雇等の方法で、価格の低下に即座に反応することができる。農業においては、かかる生産の縮小は、恐らく一定の時期（播種期、収穫期に収穫量の一部分を収穫することを拒否するという方法によって）になしうるにすぎないのである。もし恐慌が割合暫時的であれば、農業は生産の収縮によって、簡単にそれに反応する暇がありえないのである。のみならず、気象学的条件及びその他の条件による収穫量の変動が、将来におけるためらいを、すなわち、生産高が不作のために以前の播種面積の下においても低下しうるという危懼をつくりだしているのである。このことが、また農業生産物の恐慌的価格の低下の下において生産を縮小しようとする刺戟を弱めている。

しかし、全般的な周期的恐慌の農業生産活動への影響の弱い主な原因は、農業の工業からの立後れ、すなわち、新しい販売条件への適応を妨げるところの地代の諸矛盾の中に潜んでいる。

総じて次のような結論をなすことができる。全般的過剰生産恐慌と再生産循環の作用は、明らかに、農産物商品価格の運動に、従ってまた、生産者達の貨幣所得と利潤率の運動にあらわれる。それは循環局面の交替の直接的影響下にある工場制工業用原料生産の活動にもあらわれるが(註3)、しかし、工業生産活動におけるよりもはるかに弱い。その他の農業部門の生産運動においては、その中でも、穀物生産のような極めて重要な部門には、循環局面の交替は更にヨリ弱くしか現われないのである。農業においては、明瞭にあらわれる固定資本の再生産の循環、固定資本の更新及び拡張の過程は、特に、大規模な資本主義的機械制生産の支配的な段階に未だ達していないような条件のもとにおいては存在しないのである。

かくして、全般的過剰生産恐慌及び再生産の循環性は農業においても作用するが、しかし、第二次的な未発達な形態においてである。これは——資本制地代の矛盾によってひき起されるところの、農業の工業からの立後れの表現及び現象の一つである。マルクスが循環について多く述べた中で、通常工業的循環をもって循環と呼んでいるのは偶然ではない。再生産の循環性が農業にあらわれるに応じて、それは工業における循環局面の交替及びそれによってひき起される農産物商品への不安定な需要の交替局面の直接的結果としてあらわれる。

（註2）一八五〇年マルクス及びエンゲルスはヨーロッパ大陸における循環局面の交替について、イギリスに対してここではその過程は「第二次及び第三次的形態において《Во вторичной и третичной форме》」経過すると書いた（К. Маркс и Ф. Энгельс: Соч., т. 7, стр. 466）。

（註3）К. Маркс: Теории прибавочной стоимость, II, Госполитиздат, 1957. стр. 534-535.

（註4）См. К. Маркс: Капитал, т. III, М., Госполитиздат, 1955, стр. 124-125.

四　農業恐慌

全般的な周期的恐慌の契機として発生し、それと同時に克服されるところの農産物商品の過剰生産が、時々農業恐慌と呼ばれる（называется аграрным кризисом）。しかし、かかる「農業恐慌」は経済学の特殊な範疇であろうか？　それは如何にして特殊な生産関係と法則性を表現しているのであろうか？

マルクス主義経済学は、それらの諸部門のそれぞれが全般的な周期的恐慌期において過剰生産を経験しはするけれども織物恐慌、冶金工業恐慌、機械工業恐慌、等々といったような経済学的範疇を知らない。同様に、マルクス・レーニン主義の古典学者達が、一八二五年、一八三六年、一八四七年、一八六六年、一九〇七年、等々の農業恐慌についてかつて言及したということをわれわれは知らない、たとえこれらの年の周期的な全般的過剰生産恐慌が農業に、特に、農産物原料の価格運動において一定の現象を見いだしたとはいえ。

厳密に研究してゆく場合には、問題は一つの単なる術語の範疇を越えるのである。かかる「農業恐慌」概念の解釈は、通常、農業恐慌の運動の本質及び諸形態についての特殊な概念と結びついていることが問題なのである。それに応じて、農業における恐慌法則の作用が同様の「農業恐慌」によってすぐい出されるのである。再生産の循環性は工業におけると同様に農業においてもあらわれ、農業恐慌は周期的性格をもつ。農業恐慌は周期的であり、多かれ少なかれ

明確な時間的間隔をおいて繰り返される。最後の二つの結論は全般的過剰生産恐慌の農業における作用の形態として、農業恐慌の一定の本質そのものの中に既に含まれていることは労せずして認められるところである。蓋し、決定的なものは、循環的ということと周期的ということである。

かかる概念は、本質的には農業恐慌の問題を過剰生産恐慌の特殊形態として解消する。全般的な過剰生産恐慌の農業における特殊なあらわれについての問題のみが残される。しばしばそれも解消される。すなわち、この点に関しては、工業と農業との間には何らの本質的差異がないということを論証することにあらゆる努力が向けられるのである。

かかる考え方に同意することはできない。それは実際の現実と矛盾する。農業における恐慌法則の作用の主要な特質は、それが全般的過剰生産恐慌の農業への波及（распространение）によっては究めつくされえないで、同じく農業恐慌の発生として現われるということにあるのである。それらは特殊な農業恐慌であり、過剰生産恐慌の特殊形態である。すなわち、それは全般的な周期的恐慌に解消されず、その運動は循環局面の交替の中に納ってしまうものではないからである。すべて以下の叙述においては、『農業恐慌』（アグラルヌイ・クリゾイス）なる術語は、特殊な農業恐慌を標示するためにのみ用いられる。全般的な周期的恐慌の農業における作用の形態であるにすぎないところの過剰生産は単に、周期的過剰生産（циклическое перепроизводство）と標示することができる。

農業恐慌は過剰生産の恐慌であり次のことを意味する。

(a)この恐慌は資本主義的であり、その本質、諸形態を理解することは資本主義の経済法則に基づいてのみ可能である。農業恐慌理論は一般恐慌理論の構成部分であり、農業恐慌の法則は、恐慌法則の作用の独自的形態である。

(б)農業恐慌を不可避的にひき起す原因は、資本主義の基本矛盾――生産の社会的性格と資本主義的領有（資本主義的所有形態）との間の――である。資本主義的農業の固有の矛盾が錯綜しているにすぎないのであって、それは農業恐慌の根拠（原因）を変えない。

(в)多くの資本主義諸国の農業において小規模生産が重要な役割を演じているという事情のもとにおいては、しかし、農業恐慌のこの本質及び主要な特質が誤って説明されている。農業恐慌の本質を小規模な農民経営及び小規模な資本主義的農場経営者の破壊過程に帰着せしめることはできない。かかる破壊過程のはなはだしい増大は、農業恐慌のそれぞれの重要な社会的諸結果の一面であるとは言え。

(г)農業恐慌は、あらゆる過剰生産の恐慌と同様に二重の性格をもっている。これは――社会的再生産の深刻な破壊であり、同時に、暴力的な、生産力の破壊と大衆の重い苦しみを必然的に伴う、社会的生産の破壊克服の過程、つまり、資本蓄積と拡張再生産のための障害を除去する過程である。資本主義的恐慌にはつねに合法則性が作用する。すなわち、恐慌があらわれるところのあらゆる過程が、

恐慌を克服するための、恐慌から脱出するための諸条件を創り出すことを促進するのである。同時に、恐慌からの脱出は、農業恐慌の反復の不可避性を創り出すような方法で実現されるのである。農業恐慌の発生と反復は、偶然にではなく合法則的に生ずるのである。なんとなれば、その不可避性は資本主義の本質とその矛盾そのものに源を発するものだからである。

このようにその主要な特徴は、農業恐慌においても、他の資本主義的過剰生産恐慌におけると同様である。過剰生産恐慌の特殊形態にそれを帰せしめるところの農業恐慌の特質なるものは次のことに存する。

(a)農業恐慌は、資本主義的再生産の全般的矛盾のみならず、地代及び農業の工業からの立後れの法則と結びついている資本主義的農業の特殊的矛盾の爆発である。

(б)農業恐慌は、原則として長引くものであって、全般的過剰生産恐慌とその期間において一致するものでなく、全般的な経済循環の他の局面にまで延び、若干の経済的諸循環の期間に亘ってまで長びくことさえありうるほどである。

(в)農業恐慌のかかる長期性は、農業恐慌が全般的な周期的恐慌に解消されず、後者の周期性と何らかかわりなく、その運動は全般的な経済循環の局面の交替の領域内に納められない、ということを意味する。同時に、それは固有の周期性を有せず、一つの農業恐慌を他の農業恐慌から区別するものは期限であるが、それは多かれ少なかれ明確なものではない。それらは農業に固有の周期性、すなわち、特殊な農業循環局面の交替を創造しない。農業恐慌は、かくしてその発生、展開、克服が全般的な経済循環局面の交替と緊密な関係にあるとはいえ、循環性もなく周期性もないのである。

一九四七―一九四八年、アメリカ合衆国ではじまり、今まで（一九五八年）続き、不可避的に独自的深さに累積し、当面の世界的な全般的過剰生産恐慌の展開と共に、あらゆる新しい国々を席捲しているところの農業恐慌を措けば、資本主義経済の歴史は、明確にあらわれた二つの農業恐慌を知っているにすぎない。一九世紀七〇年代の前半に始まり九〇年代の後半に終った恐慌と、一九二〇年に始まって第二次世界戦争まで続いた恐慌が即ちそれである。これらはそれぞれ、資本主義経済が2―2½の経済循環を通って三つの全般的過剰生産恐慌（一九世紀第四・四半期においては一八七三年、一八八二年、一八九〇年、及び二つの世界戦争の間――一九二〇年、一九二九年、一九三七年）を経験したほど長い期間を含んでいる。

全般的過剰生産恐慌の農業への波及及び、特殊な農業恐慌発生の一般的基礎は農業における資本主義の発展である。「特殊な種類の商業的農業の形成は――とレーニンは書いている――可能性と必然性をもって、農業における資本主義的恐慌と資本主義的過剰生産の機会をつくり出す」[註5]。一九世紀第四・四半期の農業恐慌に関する問題を究明して、レーニンは次のように力説している。「資本主義的農業はいまや、資本主義的工業に特有であるところの不安定な状態に

なげ込まれ、市場の新しい条件に適応することを余儀なくされている」(註6)と。しかし、共通の基礎を有しながら、農業における恐慌法則の作用のこの二つの形態は同一ではないのである。それらの間の相違は、その本質及び根本原因にはかかわりない。それは、資本主義的過剰生産恐慌の二つの現象形態の相違にすぎない。しかし、この相違は重要である。農業恐慌問題の矛盾した説明は、少なからず、これらの相違を無視することと結びついている。

（註5） В. И. Ленин: Соч., т. 3, стр. 270.
（註6） В. И. Ленин: Соч., т. 4, стр. 140-141.

五　長期農業恐慌における農産物商品の周期的過剰生産進展の諸条件

農業の後進性の故に、全般的な周期的恐慌の諸条件の下における農産物の過剰生産は第二次的形態で、つまり、工業における恐慌の爆発とそれによって惹き起される農業生産物への需要の収縮の結果として展開されるということは既に述べた。この場合、農産物商品の過剰生産は、総体としてのあらゆる経済機構における資本主義的蓄積の矛盾が高揚局面において周期的に尖鋭化することによって準備されるのである。

周期的方式の資本主義的蓄積の矛盾のかかる種類の尖鋭化は、全般的過剰生産恐慌の農業への波及にとっては全く十分であるが、農業恐慌の発生にとっては不十分である。それぞれの周期的恐慌において、過剰生産は多かれ少なかれ、農業のあれこれの部門に波及するが、しかし、それは農業恐慌には少しも進展しないのである。例えば、一八二〇―一八七〇年の周期的諸恐慌の一つたりとも、農業恐慌展開の出発点とならなかったし、一九〇〇年及び一九〇七年の恐慌もまた同様である。

農業恐慌に進展する過剰生産は第二次的ではない。その主要な根底をなしているものは農業そのものの矛盾の尖鋭化であって、農業生産物に対する工業需要の周期的収縮ではないのである。

農業恐慌発生において決定的な役割を有するものは、内部的矛盾と農業の発展過程である。だが農業が機械制よりもマニュファクチュア段階に近い資本主義的発展の水準にとどまっている間は、どうしてかかる農業における自立的な、或は固有の恐慌が発生しえようか？

農業恐慌発生の可能性をつくりだす一般的前提は、総体としての経済機構に恐慌法則が力を発揮することである。農業恐慌の歴史の経験は同時に次のことを示している。それらは生産の社会的性格と私的領有との間の矛盾のかかる尖鋭化の基礎上で生ずる。そしてそれが周期的ではないがもっと深い構造上の整頓の過程を呼びおこす。暫時的ではなく長期的な作用をもち、農業自体に直接的に烈しく現象し農産物商品の生産及び実現の諸条件を本質的にかえるのである。

一九世紀第四・四半期の農業恐慌発生における決定的な意義は、六〇年代に始まったアメリカ合衆国、ロシア、印度、その他の一連の国々の農業における資本主義の発展を促進したことである。多くの新しい土地がわがものとされ、それらの中には地代がない或は殆んど地代のない土地があり、運輸手段の技術的革命が、地球の相互に遠くにある国々の農業生産物の世界市場における競争の可能性をつくりだしたのであった。

一九二〇―一九四〇年の農業恐慌の展開において重要な役割を演じたのは次のことであった。大衆、とくにヨーロッパにおける大衆の貧困化と購買需要の制限の下での、世界戦争時代の特殊な景気によってひきおこされたアメリカ合衆国その他の大西洋彼岸諸国の農業生産の強力な増大、すなわち、アメリカ合衆国及びその他一連の諸国の農業における資本主義的発展の機械制的段階への移行の促進である。

農業恐慌に導くところの農業商品の生産と実現の条件の深刻な変化は、資本主義の全般的進展と分ち難く結びついている。農業恐慌は、それ故に、あらゆる資本主義経済機構において、その矛盾の累積を極端に強化する過程が全面的に特殊な重要性をあらわすときに発生する。農業恐慌は、農業における世界資本主義の矛盾のかかる尖鋭化の特殊な現象形態なのである。この結論は農業恐慌の全史によって確証される。

一九世紀の最後の三分の一期は、資本主義、その生産力、その矛盾の加速度的発展の時期であった。世界市場には、強力な競争相手があらわれた。資本主義的発展の不均衡は鋭く激化し、資本の集積、集中と小規模生産の破壊は促進され、植民地分割闘争が強化して、自由競争の支配するところから独占の支配への移行が行われたのであった。

工業においては、競争とあらゆる資本主義的蓄積の矛盾の激化が恐慌の重さと継続期間の拡大、周期的高揚の短縮、総じて、周知の循環の変形にあらわれている。農業においては、この過程が長期農業恐慌の成熟、発展を助長したのであった。

一九二〇年に始まった農業恐慌の成熟と発展において巨大な役割を演じたのは、資本主義の全般的危機の時代の到来によって惹き起された、資本主義的蓄積の矛盾の最も深刻な激化であった。このことは、農業恐慌を、資本主義の全般的危機の時代の構成的な、必然的且つ不変の特質と考え、それを慢性的な果なきものとして究明する根拠を与えはしない。しかし、資本主義制度の全般的危機の役割を考慮することなしには最近四〇年の資本主義世界における貨幣本位の極端な不安定性とインフレーション化過程、或はそこにおける経済軍事化過程の役割の増大、或は資本主義の腐朽の増大を正しく説明しえないのと同様に、かかる考慮なしには農業恐慌の展開となり行きを正しく説明することはできないのである。資本主義の全般的危機が長期農業恐慌のための好都合な基盤を創り出したことは疑いない。逆に農業においては後者は全般的危機の時代における資本主

義の経済的矛盾の特殊な深刻さの一表現となったのである。

周期的過剰生産の長期農業恐慌への進展において重要な役割を演ずるのは、その結果として価値革命（revoljucija v stoimosti）、すなわち、大多数の生産者の弱点をつき、新しい価値関係への順応を要求する農産物商品の調整的生産価格の重苦しい低下を生ずる過程が農業においても展開される、ということである。工業においては、かかる種類の価値革命は、それぞれの周期的恐慌において多くの主要な諸商品について行われるところである。それは生産方法の改善とつねに結びついているところの、周期的高揚局面における固定資本の大規模な拡張によって準備される。矛盾はここでは、高揚局面において価格が騰貴して価値から一層乖離するということに存し、これが恐慌の爆発をはやめ恐慌過程においてこの不均衡の清算が行われるのである。

手の労働が支配的である農業においては、周期的高揚の数年間の緩慢な技術的発展は、その背後に商品価値の重大な低下を結果する生産方法の変化を生ぜしめるには不充分なのである。それらは調整的生産価格の著しい崩壊を導くところの耕地構成の改善を生ぜしめるためにも不充分であった。周期的高揚の農産物原料生産に及ぼす影響を分析して、マルクスは、原料価格の高騰が最劣等地を耕作圏内にひき入れ、市場から一層はなれた地域で生産される原料を利用する必然性に導くことを指摘した。この基礎の上に、調整的生産価格の上昇が起るのである。恐慌の爆発と価格の低落と共に、最も劣悪な品質の土地は再び放置され、遠い国々で生産された原料は競争能力のないものとされる。調整的生産価格の低下は以前の水準まで行われる。[註7] しかし、かかる低下は決して価値革命とみなすことはできない（Но такое снижение оценок нельзя рассматривать как революцию в стоимости.）。それは、少数の生産者の、すなわち、最劣等地または販売市場から特にはなれた土地を耕作しはじめた人々の再生産条件を破るにすぎない。

農業恐慌は、多くの生産者達の根底にふれるところの価値革命によって伴われる農産物商品の再生産条件の深刻な変化を必ず伴うのである。かくて、一九世紀第四・四半期の農業恐慌においては、かかる価値革命は運輸機関の革命とアメリカ合衆国、オーストラリヤ、カナダにおける多くの広大な、極めて肥沃な、大体において地代のない処女地の耕作誘引をその独特の基礎としてもっていたのであった。一九二〇―一九四〇年の農業恐慌においても、アメリカ合衆国、その他多くの国の農業における広汎な機械化の確立（широкое внедрение механизации в сельском хозяйстве）が同様の結果をもたらした。

価値革命は、労働の生産性と過剰生産の発生を助長する多数商品の一層の増大をつねに必ず伴うものである。価値革命は価格の下落、価格の低下した価値水準への順応を要求する。無政府的な資本主義的経済においては、かかる順応は恐慌という方法によってのみ実現される。農業においては、この順応は非常に長引き、苦しい過程である。価値革命は農業恐慌からの脱出を困難にし、恐慌期間をひき伸す強力な要因となる。

（註7）　См. К. Маркс: Капитал, т. III, стр. 124-125.

六　農業恐慌の大規模な長期性の諸原因とその克服の諸条件

農業における二つの種類の過剰生産――周期的過剰生産と農業恐慌――との間の相違はその克服過程にあらわれる。

恐慌からの脱出の通常の合法則性は両方の場合に作用する。小企業の犠牲において大企業の地位が強化され、賃銀切下げを利用して、そして或る程度技術的改善の犠牲において生産費が低下され、恐慌、その他からヨリ少ししか損害をうけなかった部門への資本と労働の移動が実現される。しかし、農業における周期的過剰生産の発展において主要な役割を演ずるのが工業における恐慌の爆発であるだけに、それだけその克服において同様の役割を演ずるのは、工業の恐慌からの脱出とそれによってひき起された農産物商品に対する需要の増大である。

農業恐慌の克服のためにはこれは少しも十分ではない。ここで決定的な意義をもつのは農業自体の中で発展する諸過程、すなわち、農産物商品の価値革命を創りだしている新しい価値関係への順応、世界市場における勢力配置の深刻な変化、総じて本当に変化した再生産条件への順応、である。かかる順応は農業においては非常に緩慢に行われ、長期間を要する。これは地代の矛盾及び農業の工業からの立後れの法則に由来する阻害によってひき起されているのである。

農産物価格は、生産費と利潤に加うるに地代がその構成部分となっているという特質をもっている。地代は――剰余価値部分であり、その諸形態の一つである、しかし、農業に使用された資本にとっては、地代は、変化した、すなわち、倒錯した形態で実際の関係を示しているところの、現実の内容を隠蔽したところの生産費の重要な成分という形態をうけとる。地代の大きさは全賃貸借期限に亙って賃貸借契約の中に固定化されている。それはもっと大規模に、地価のうちに、すなわち土地の購入によって支払われたところの資本化された地代に固定化されている。恐慌下においては、価格の低落は自動的に利潤を低下せしめるが、（一定の水準で、長期賃貸借契約の中に、土地に対して支払われた価格の中に、抵当利子の中に固定化されたところの）地代の運動にはかかる自動現象はないのである。

かくて、農業における過剰生産恐慌に特有の、低落した価格と固定化された地代との間の矛盾が生ずる。恐慌期に通常聞かれる資本家達の泣言は、価格が生産費をも償わず損失でさえある、ということであるが、この事実はしばしば固定化された地代が新たな下落した価格水準に対応しないということをあらわしているにすぎない。

その矛盾は、その価格下落の基礎には農業生産物の価値革命、その調整的生産価格の低落が横たわっているということによってヨリ一層激化されるのである。

過剰生産恐慌は、工業においても農業においても、生産の社会的性格と資本主義的所有との間の矛盾、生産の利潤獲得目標への隷属をあらわしている。ここに、恐慌の資本主義的本質が示されている。農業においては生産の社会的性格と土地所有との間の附加的矛盾、利潤のみならず地代をも獲得しようとする目的に生産が従属するということがこれにつけくわわる。工業における過剰生産は利潤の実現が破壊される条件が作られたことを意味する。農業における過剰生産は利潤と地代の実現が破壊されることを意味する。しばしば剰余価値の実現は、資本家に利潤を、地主に以前に決められた金額の地代を保障するにはついに不足してしまう程破壊されるのである。

ここから、農業恐慌は地代の恐慌（кризис ренты）であり、それは工業の恐慌とは別の内容と原因をもっていると結論することは誤りである。しかし、正に、地代の矛盾と農業の工業からの立後れが、農業恐慌を特殊な種類の過剰生産恐慌に変形し、その一層の長期性を条件ずける重要な要因であることは疑いない。

高水準に固定された地代は、直接に農業恐慌を紛糾させ、恐慌からの脱出を困難にし、長引かせる。なぜならば、それが農業生産物の生産費の低下、低下した新しい価格水準への生産費の順応を妨げるからである。地代は技術的進歩による生産費の低下をも妨げる。

土地及び地代の私的所有は、つねに農業における技術の進歩を妨げる。恐慌期においてはその意味において地代の影響はとくに大きいのである。

工業においては、販路の見出されない在庫品をはかし、正に、過剰生産恐慌を克服することにおいて巨大な役割を演ずるのは、生産規模の縮小（сокращение размеров продукции）である。農業でも、過剰生産恐慌は稀に生産の低落によって示される。農業における全般的過剰生産恐慌の作用のこの重要な特質を条件づけている要因は、農業恐慌の経過の上にも重大な刻印を捺す。農業恐慌は、先ず第一に、価格の長期的低下にあらわれ、ずっと後れて且つ緩やかに生産の動きにあらわれるのである。農業の生産縮小が始まるためには、処女地の多年の過剰生産と価格の低落が必要である。若干の国々では、農業恐慌は一般に農業における生産の縮小に導かない。そのために価格の低落が激化し、恐慌が尖鋭化すると同時に、恐慌からの脱出が長引き困難となる。

全般的過剰生産恐慌の農業におけるあらわれも、農業恐慌もその重要な特殊性の主な原因は次のことにある。

既耕地にも未墾地にも地代を支払うことが必要である。このことが、農業生産物の価格の低落の下においてさえも、もしそれが非常に長く深刻でなければ、以前の水準に播種を維持することを余儀なくさせているのである。固定化された地代と抵当負債の重荷が、農業生産物価格のそれぞれ新たな低落と共にかさむ。これらを必然的に伴う支払を支弁するためには、増加する多数の商品をすべて実現しなければならない。このことがしばしば農場経営者をして、恐慌状態においても以前の農業生産規模を維持し、市場に放出する多くの農産物商品を増大することさえを余儀なくさせるのである。

農業には、通常、工場制工業において独立に機能するには不充分なほどの量の小資本が使用される。その所有者達は、それ故に、平均以下の利潤率をもって満足することを余儀なくされることが特にしばしばある。彼等は極端に低い利潤を保障するにすぎない価格の下でも、そして、生産費と地代の支払を辛うじて償うにすぎないような価格の下でさえも、以前の生産規模を維持するために、あらゆる可能性（все возможности）を利用する。

小商品生産者はヨリ多く半自然経済と結びついているといわれる。彼は、抗し難い困難、すなわち、税金による損失、家族労働力数の縮小（уменьшение числа работоспособных членов семьи）、後継者の欠除、小作地に対する支払不能、等を余儀なくされた場合にしか生産を縮小しない。彼は、自分の剰余労働を償わないのみならず、しばしば彼に最低の「賃銀」、最低の生活手段をも保障しないような価格、すなわち、利潤獲得のための営業原理による資本主義的企業ならば生産をやめてしまうような価格のもとにおいても、前と同じ規模で生産を続ける。価格が低落する場合には小生産者は、以前の生産規模でも、生産規模を縮小してさえも、飢餓的最低以下への私的消費を切りつめるという犠牲において商品の供給をしばしば増加しさえするのである。彼にとっては、税、地代、その他の支払を償って自分の零細な土地に自己を維持するためにヨリ多く販売することが必要である。これが農業恐慌からの脱出を困難にするのみならず、農業恐慌の激化に導く。

最も大きな資本主義的農業諸企業は、農業恐慌及び価格低落の状態においても、以前の生産規模を長く維持する可能性を有する。なぜならばその生産費は平均より著しく低くなっているからである。それは破産した経営の土地を安価な価格で買占め、農業労働者の賃銀を一層大きく引きさげ、またヨリ一層の生産の機械化によって恐慌からの脱出を探し求める。これは大経営の採算性を高め、その農業恐慌からの損害を減少せしめるが、しかし、しばしば過剰生産を増し、農業恐慌の長期性を増大せしめる。

周期的過剰生産では極めて稀であるが、大規模な延引をともなう農業恐慌は農業生産の低下に導く、ということは、決して農業の優越性（преимущество）ではないが、新しい販路の条件への農業の順応の遅滞性の指標（показатель）である。これは――農業の後進性及び地代の矛盾の結果であり、農業恐慌の長期性増大の重要な要因である。

帝国主義と資本主義の全般的危機の時代には、農業における独占の圧力と資本主義制度の全般的危機を表現している特殊な経済的諸矛盾が、農業恐慌からの脱出を困難にし、その持続期間を拡大せしめるところの附加的な重要な諸要因となる。独占が農業生産物を買

占める独占的に低い価格、農業経営者によって独占から購買されるところの機械・肥料・その他の生産手段、同様に消費物資の独占的に高い価格、抵当負債その他の銀行負債の圧力、軍事化政策と軍事費によってその重みを増している税金の圧力、工業成長の全般的停滞、第一次大戦と第二次大戦の間の周期的な全般的過剰生産恐慌の重さと持続期間の増大、農業生産物及び農産物原料からつくられる商品に対する需要を制限する大衆の貧困化。ここには農業恐慌克服のための追加的困難を創り出すとともに現代資本主義における農業恐慌の発生を緩和する過程について決して十分に列挙されてはいない。

農業恐慌の特殊性にもかかわらず、それからの脱出は、工業恐慌からの脱出と同じ法則性にもとづいて行われるが、しかし、農業では、それが遙かに緩慢に作用するのである。農業恐慌はその性質上、工業の恐慌と同じく、慢性的ではありえない（не может быть хроническим）。農業恐慌そのものは、再生産過程の矛盾の爆発であるのみならず、多くの生産者の零落を必ずともなう、価格の低落、在庫品の駆逐、生産の縮小、生産費の引き下げ等によって生産及び実現の新しい条件に対する農業の長い、苦しい順応の過程なのである。農業恐慌の克服において大きな役割を演ずるのは、地代の引き下げ、土地価格の低落である。

農業恐慌の過程で、地代が次第に低下し、それが農業恐慌からの脱出を容易にする。しかし、その低下は緩慢に行われ、ただ長期に亙る農業の恐慌状態の結果行われるのである。それは、新たに土地を賃借したり購入したりする人に利益をもたらすにすぎない。借地期限が切れていない借地人達は、農業生産物価格の低下のもとにおいて以前の大きさの地代を支払うことを余儀なくされる。このことが地主によって領有される所得部分を増大し、しばしば賃借地人を破産せしめる。地代の引き下げは、零細農業（парцелярное земледелие）、すなわち、物納借地、雇役借地その他の封建農奴制的遺物の存続をあらわしている諸形態には、原則として波及しない。農業恐慌によってひき起された地代の引き下げそのものは、一時的にのみ反作用するが、しかし増大への一般的傾向を排除するものではない。

農業恐慌からの脱出は、特殊化され分離された過程としてでなく、資本主義の全般的進展及び経済的循環局面の推移と結びついて行われるのである。農業恐慌の開始が全般的な周期的恐慌の開始と同時に起れば、その克服は工業における活況及び高揚の局面と一致する。農業恐慌からの脱出においては非循環序列的な全般的な経済的発展の過程も重要な役割を演ずる。一九世紀第四・四半期の農業恐慌の克服が、九〇年代における多くの国々の工業化過程の促進によって緩和されたように。一九二〇―一九四〇年の農業恐慌からの脱出は、世界農産物商品市場に新しい事態を創り出した第二次世界大戦によって促進された。

それぞれの経済恐慌は多数の経済的に弱い企業の破綻、生産の資本主義的集中のヨリ一層の進展を伴う。恐慌は前資本主義的生産諸関係の解体過程と資本主義的諸関係によるその代替を促進する。これが、巨大な破壊力をもって小規模生産に襲いかかる農業恐慌にも大いに関係をもっている。しかし乍ら、農業恐慌は農業の資本主義的発展を促進しつつ、そのことによって、新しい拡大された基礎での自己反復の地盤を準備するのである。

それぞれの恐慌からの脱出はプロレタリアートの搾取強化を利用して大規模に行われる。資本主義的農業においてはこの法則性が同じく特別の力をもって現象する。農業プロレタリアートは労働者階級の最下層に属する。その農業プロレタリアートの著しい部分は一片の土地に縛りつけられ、所与の資本家または地主の、資本主義的方法の指導的な経営に自己の労働力を最も苦しい条件で販売せざるをえない分与地持ちの日傭農夫からなっている。村落には農業の過剰人口の形態で多くの労働予備軍がいる。農業プロレタリアートは精神統一についてはさておき、その組織性の程度においても工業プロレタリアートに立後れている。すべてこのことがその搾取強化を容易にしている。地主はしばしば地代という形態で、資本家の利潤部分や農業労働者の状態をなお悪化させる程、農業労働者の賃銀部分をも領有する。

地代によってつくられるところの恐慌からの脱出の困難さをば、資本家は恐慌の結果から最も烈しく被害を蒙る労働者の搾取を一層強化することによって解決しようと努力する。労働賃銀の低下は次のような裏面をもっている。すなわち、労働賃銀が低下すればするほど機械導入のための刺戟が少なくなり、技術進歩の遅滞は農業の低落した価格水準への順応を困難にする。

七　長期農業恐慌と農業における再生産の循環

理論的困難は、全般的な周期的恐慌及び再生産の循環の作用が非周期的な長期農業恐慌と如何に結合するかということについての問題である。もしも、再生産の循環と循環局面の交替が農業において工業におけると同じ程度に発達し明白に反映されるならば、長期農業恐慌なるものはありえない。農業は工業と一緒に周期的恐慌及び不況から周期的活況及び高揚へ移り、同時に農業恐慌を経験するということはできない。

矛盾を感じながら、若干の著者達は、農業恐慌なるものを地代の危機あるいは、農業が周期的な高揚局面にあるときに存立しうる小農民経営の危機に帰着せしめることによってそれを解決しようとする。それと共に、農業恐慌からその本質が抜きとられ、それが資本主義的な過剰生産恐慌であるということが無視される。他の人々は、農業における過剰生産恐慌も工業におけると同様に循環的であり周期的であるにすぎないと断言して長期農業恐慌を否定しはじめる。

Л・И・リュボシッツも本質的には解決を与えてもいないし問題に気付いてもいないのであって、これが彼の貴重なる農業恐慌研究[註8]

の本質的欠陥（существенный недостаток）である。彼は全般的過剰生産及び再生産の循環の農業における発現をみていないが、それを考慮することなしには、非循環的な長期農業恐慌の可能性は理解しがたいのである。

農業における恐慌法則の作用は多くの特殊性をもっている。二種類の過剰生産恐慌、第二次的形態での周期的過剰生産の発生、不明瞭にあらわれ未発達な生産活動における再生産の循環等がすなわち之である。それらが地代の矛盾と農業の工業からの立後れの法則の一般的基盤の上で発生するということのみならず、それらが著しい程度に相互に条件づけあっているということによって、すべてこれらは相互に作用し合っているのである。

もしも、農業が工場制工業と同様に、循環的高揚と再生産の循環に参加するならば、農業の工業からの立後れは全般的な周期的恐慌を早める、経済における不均衡の発生の深い原因の一つであるというレーニンの命題は誤りであろう。その場合には、全般的過剰生産恐慌は農業においても第二次的形態においてでなく作用するだろう。そのときには、非循環的な長期農業恐慌の可能性そのものが削除されよう。非循環的な長期農業恐慌は正に次のことによって可能なのである。農業は固定資本及び生産の拡大の飛躍性（скачкообразность）、痙攣性（спазматичность）といった工業のような性格を知らないこと、全般的過剰生産恐慌及び循環局面の交替が農業においては主として価格の運動、貨幣所得にあらわれ、物質的生産領域、生産活動においては、不明瞭な未発展形態で滲透するということすなわち之である。

農業恐慌は農業における再生産の循環に表裏の影響を与える。それは農業の周期的高揚への参加をもっと大規模に弱め、本質的には、農業そのものが高揚局面に突入する可能性を削除している。高揚局面の脱落した循環は矛盾が特に尖鋭化した場合には工業にもみられる（一八八二—一八九〇年周期における英国の銑鉄製品工業と造船工業、一九二〇—一九二九年周期における英国の全産業、同周期におけるアメリカ合衆国の石炭、木綿、銑鉄製品工業、一九二九—一九三七年周期のアメリカ合衆国の全産業、等）。再生産の循環はこれによって決して廃棄されるのではなく、修正されるにすぎない。なぜならば、循環において主要なものは周期的な全般的過剰生産恐慌の反復なのであるから。この意味において、長期農業恐慌は農業における循環局面交替の作用を強化する。何故ならば、周期的な全般的過剰生産恐慌は、それが長期農業恐慌と同時に起るときには相互に強化し合い融合して、農業における特殊な破壊力をもつからである。

農業恐慌は循環性をもっていないのに、循環局面の交替と緊密に結びついて展開する。原則としてそれは全般的な周期的恐慌と同時にはじまる。農業恐慌の終結は全般的な周期的恐慌の時期には不可能であり、通常、工業が活況または繁栄局面へ移行すると共に行われる。たとえ農業恐慌克服の諸前提が未だ成熟しなくとも、工業が周期的恐慌及びそれに続く不況から活況と高揚に移行すれば農業恐慌の緩和（смягчение）が到来する。それは殆んど尖鋭化しなくなり、ときどきあまり明瞭には現象しないが、その代り全般的な過剰生産恐慌とともに再び烈しく強化する。農業恐慌が全般的な周期的恐慌と同時に起っているときには、それと融合してその構成部分となる。

（註8）См. Л. И. Любошиц: Марксистско-ленинская теория аграрных кризисов. М., 1950.

八　結論・農業における過剰生産恐慌の二つの形態の一般的特徴

かくて、資本主義的な過剰生産恐慌は、農業においては二つの形態で、すなわち周期的過剰生産と長期農業恐慌として発生する。

周期的過剰生産は全般的な周期的恐慌の農業における作用の形態である。それは農業においては第二次的形態で、すなわち、工業における恐慌の爆発及びそれによってひき起された農産物原料及び食料に対する需要の収縮の結果として発生する。全般的過剰生産恐慌の農業における作用のかかる形態は、農業の工業からの立後れからくる。すなわち、周期的高揚局面において、農業は工場制工業のような固定資本の大規模な拡大及び痙攣的な生産の拡大を知らないということ、高揚の終り近くにはしばしば、農産物原料及び食料に対する工業需要の増大と緩慢にしか増加しないそれらの供給との間に不均衡が生ずる。

農業恐慌の発生において極めて重要な意義を有するのは、農業そのものにおいて発展しその再生産の条件を深く破壊し、農業生産物の価値革命を必ず伴う過程である。周期的過剰生産はしばしば、農産物価格の低落のみならず、それらのうちの若干の調整的生産価格の低下を必ず伴うものである。しかし乍ら、原則として、このことは、自然的豊度及び位置において最劣等の土地が耕作に一時的にひき入れられることによって惹起された、高揚局面における調整的生産価格の一時的上昇に対する反動にすぎない。その場合には、この最劣等地を耕作にひき入れた資本の再生産のみが破壊されるにすぎない。農業恐慌の展開が必ず伴うところの価値革命は、農業における多くの固定資本の再生産条件を破壊する調整的生産価格の重苦しい低下なのである。[註9] 資本主義的発展の水準において最も発展した国々の経済においても二〇世紀の三〇年代に至るまで機械制よりもマニュファクチュア段階に近く留っていた後れた農業においては、価値革命を必ず伴う過剰生産は数年間の周期的高揚だけでは発生しえないのである。それは農業における生産及び実現の条件を本質的に改変するヨリ深い長期的作用によって準備される。すなわち、その過程は一九世紀第四・四半期と一九二〇—一九四〇年に行われたように、特殊な具体的歴史的諸事実によって条件づけられた全体としての経済における資本主義的蓄積の矛盾の非常な尖鋭化、通常必

ず伴うものである。

農産物商品の周期的過剰生産の克服においては、一部の生産者の零落、しばしば最劣等地の耕作圏外への放逐等、農業自体の中で発展する諸過程が若干の役割を演ずることができる。しかし乍ら、その克服のために決定的な意義をもっているのは工業の恐慌からの脱出とそれによって惹き起される農業生産物への需要の増大である。周期的過剰生産からの脱出は第二次的形態で、工業における恐慌の克服の結果として行われる。

農業恐慌の克服のためには、周期的過剰生産と異なって、販路及び生産の新しい条件への、すなわち農産物商品の価値に革命をつくりだした新しい価値関係への農業そのものの順応が決定的に重要な意義をもっているのである。この順応は、長い時間を要するので農業恐慌に長期的性格を附与する。農業恐慌を長引かせる重要な諸要因は次のごとくである。

(a)農業生産物の低下する価値、生産価格、市場価格と、多年の低落した価格と多数の農場経営者の破産の後にのみ低下しはじめるにすぎないところの、以前の水準に固定化された地代との間の鋭く長い闘争。

(б)生産の縮小によって過剰生産を克服することに対して地代及び農業の後進性が障害をなしていること。価格の長い深い低落のみが播種面積の削減、一部の播種廃棄、等を起させる。

(в)資本の移動、技術の進歩、専門化の増大等による恐慌からの脱出のための闘いに地代及び農業の後進性が障害となっていること。

(г)帝国主義の諸条件においては、農業の後進性に由来するところの農業における独占の特殊な圧力諸形態も農業恐慌からの脱出を困難にする。

(д)農業恐慌は、その展開に導く過程そのものが長期的性格をもっているということによっても手間どる。

(e)この過程が一九世紀第四・四半期と二〇世紀の二〇―三〇年代に行われた様に、工業を含むあらゆる資本主義的世界経済の再生産の矛盾の全般的激化に基いて展開していることも重要である。

かくて、地代の矛盾と農業の工業からの立後れは、農業恐慌の原因ではないが、その大規模な長期性及びあらゆる特殊性を特殊な種類の資本主義的過剰生産恐慌として条件づけている。それらは全般的経済恐慌及び循環の農業における作用の既に指摘された以上の特殊性をひき起す。それによって、農業における恐慌――農産物商品の周期的過剰生産――の特殊性その他の諸形態が明確にされる。

長期農業恐慌の時期には農産物商品の周期的過剰生産は独立の過程（самостоятельный процесс）としては表面に現われない。それは農業恐慌に合流し、農業恐慌の中に解消し、農業恐慌に吸収される。併し、それは独自の意義を失うことなく、農業恐慌の烈しい尖鋭化という形態としてあらわれるのである。

アメリカ合衆国と若干の他の国々で行われているところの、農業の大規模な資本主義的機械制生産の支配的な段階への移行は、工業

と農業における恐慌法則の作用の形態が統一される傾向を強化する。しかし、それは恐慌法則の農業における作用の特殊性を除去することはできない。蓋し、その特殊性の原因となっているところの地代の特殊な諸矛盾及び農業の工業からの立後れの法則は除去されないのだから。その統一への傾向の作用は、農業における大規模な資本主義的機械制生産の支配の確立が現在の資本主義の諸条件においては、資本主義世界の大多数の国にとって、特に植民地及び半植民地にとっては不可能である、ということによって制限されている。その崩壊の時期にある資本主義的生産様式そのものの存立の歴史的期限の制限性はさて措き、資本主義の全般的諸矛盾とその全般的危機の時代の特殊な諸矛盾がそれを妨げるのである。

（註9）農業恐慌の展開における価値革命の意義はП・И・リャシチェンコ、次いでЛ・И・リュボッツが正しく指摘したところである。

――一九五八・九・一〇――

経済学年報 Ⅱ

経済理論における経験と論理 ……富田重夫
――マルクシズムの認識を中心として――
労働供給機構の
変位に関する計量的考察 ……尾崎巌
――賃金率と家計の有業率――
日本中小工業問題の源流とその背景 …尾城太郎丸
アメリカ農村工業の成立……中村勝己
一八八〇年代のイギリスにおける
社会主義の復活と労働組合運動……飯田鼎
――イギリス労働党の起源について――

定価 四三〇円
郵税 三二円

発売所 東京高輪局区内三田綱町一 慶應通信